

アブデュルレシト・イブラヒム

(一八五七〜一九四四)

横浜市立東高等学校 智野豊彦

一 ロシア帝政下のタタール人

タタール人は中央アジア各地に住んでいるテュルク系民族である。ヴォルガ川中流域のフィン・ウゴル系先住民と、後から来着したブルガールなどのテュルク系集団との混交によって生まれた人々がいた。一〇世紀からイスラーム化が始まり、一三世紀のモンゴル到来以降、彼らはモンゴル系部族のタタールの名称で呼ばれるようになった。そしてキプチャク・ハーン国をはじめタタール系のハーン国が生まれ、タタールを名乗る集団が中央アジアに出現したのである。

一五五二年、モスクワ大公国イワン四世がカザン・ハーンを滅ぼし、多数のタタール人を虐殺してロシア正教会を建立した。イワン四世はタタールの抵抗運動を根絶するために「改宗するか、封建的特権を放棄するか」の、二者択一を迫った。改宗したタタール人は十字架を意味する「クリヤシエン」と称され、改宗すると三年間の免税や徴兵猶予の特権に浴した。一方「クリヤシエン」をイスラームに再改宗させようとした者には死刑が科せられ、「クリヤシエン」の納税や兵役義務もムスリムが代行させられた。またロシアはムスリムをキリスト教徒に改宗させるためにカザン大司教がしきる「新規改宗者取扱局」を設置し、動揺しがちな信仰を揺るぎなくするために、教導隊を各地に送り懲罰によって正教の儀礼を遵守させたの

である。

このような強引な改宗・同化に対して、エカテリーナ二世は寛容政策をとり、「新規改宗者取扱局」などを廃止した。エカテリーナ二世はイスラームを進んだ啓示宗教として評価したヴォルテールに感化された啓蒙専制君主であった。彼女は、イスラームが東方未開遊牧民族の文明化や東方の安定に寄与すると信じたのである。また寛容政策によってタタール商人の東方貿易を発展させることと、オスマン帝国によって不満を持つムスリムやトルコ系諸民族を焚きつけることを防ぐことも動機となった。このような寛容政策の流れの中で、ロシア帝国で初めて公認されたムスリム組織として「ムスリム宗教者協議会」が一七八八年にウファで作られた。

この「ムスリム宗教者協議会」に九二年から九四年にかけてカーディーを努めたのが本稿の主題であるアブデュルレシト・イブラヒムである。彼は後に協議会の腐敗と停滞を批判して辞任することになる。

二 タタール人と日本

タタール人がどのようにして日本と接触するようになったのだろうか。エカテリーナ二世の寛容政策があったとはいえ、帝政ロシアは一貫してギリシア正教への改宗を奨励していたことにはかわりはなかった。クリヤシエンは立身出世も、社会的進出も可能であったが、信仰を守るムスリムにはそれは望めなかった。このため彼らは活動の場を商業に求めていった。タタール人はその宗教とトルコ系言語の利点から中央アジアへ市場を開拓していった。シベリア鉄道・東清鉄道の起工によって、多くの労働者・技術者などが来住した。また鉄道開通による市場拡大を予想してロシア人やユダヤ人の

商人と共にタタール商人も移住してきた。すでに一八六一年の農奴解放令によって帝政ロシアでも資本主義的萌芽があり、モスクワ近郊の綿製品を東方に売りさばく役割を担っていたともいえる。

しかし義和団事件後の満州北部占領という好条件にもかかわらず、満州市場はロシアの独占ではなかった。日露戦争以前における満州の綿製品市場で圧倒的優位に立っていたのはアメリカであり、これを追って日本の綿製品が入り込み帝政ロシアをしのぐ勢いを示していた。さらに日露戦争において、日本とタタール人は戦争で交えるのである。

仕事が軌道に乗ったタタール人は家族を呼び寄せ、東清鉄道沿線の満州里などコミュニティを作った。タタール人として、ムスリムとして、アイデンティティを守り伝えていく協会の設立が求められ、協会の建物、付属図書館、学習室が作られ、一九〇六年にモスクが落成されるのである。

三 イブラヒムの来日

日露戦争以前からロシア帝政批判をしていたイブラヒムは、ヨーロッパ旅行中に亡命中の社会主義者たちと接触し、一九〇四年にロシアの要請を受けたオスマン政府により強制送還されオデッサの監獄に投獄される。このようにイブラヒムはロシアにとって危険な汎イスラーム主義者であり、対露工作で名高い明石元二郎と肝胆相照らしてという説もある。

日露戦争と第一次革命はロシア帝政に動揺をきたし、ムスリムの民族運動は高揚を迎える。ペテルブルク・カザン・タシケントなどではムスリムの新聞・雑誌などが相次いで誕生する。さらに三度にわたるムスリム会議が招集され、ムスリムの連帯と権利の拡大を

目的とした初めての政党「ムスリム連合」も組織された。イブラヒムはムスリム会議開催をウィットと交渉し、また雑誌『ウルフェト』の創刊を果たした。しかし一九〇七年になると反動が始まり、新聞・雑誌は発禁処分を受け、活動家はイスタンブルなどへ亡命していく。イブラヒムは年末に家族を残してロシア領トルキスタンに旅立ち、約一年間中央アジアを放浪し、シベリア鉄道を横断し、タタール人コミュニティの世話によって旅が続けられたのである。イブラヒムはこの間各地のムスリム事情を観察しイスラーム世界を列強の支配から解放する戦略を構想した。そして日露戦争に勝利し発展する日本の力を期待をかけるようになる。イブラヒム以外にも汎イスラーム主義者達が、「日本がイスラーム化することによってイスラーム世界が強力な求心力を得、欧米勢力に対抗するだけの力をもてばよいという希望が生まれ」、何人ものムスリムが来日している。こうしてイブラヒムは一九〇九年、二月二日ついに日本の教賢に到着するのである。イブラヒムは日本に來日してそのイスラーム化を確信した。その理由を『ジャポニヤ』からみていく。

四 『ジャポニヤ』の記述の分析—日本のイスラーム化—

A イブラヒムの日本人観（道徳習慣）

イブラヒムは一九〇九年二月二日から六月一七日下午関から中国に向かう約六ヶ月間日本に滞在し、一介の車夫から明治の元勳たちまで様々な日本人を描写している。

イブラヒムが、「釜山丸」から敦賀に上陸するとき、船の運賃やチップを要求されず、車内の清掃にあたって少年もチップを要求しない。また茶店でお茶を飲み、店のものがないので一銭を置いて出掛け、夕方その店の近くを歩くと店の女が走ってきてお釣りを

渡しに来る。このような行動はイブラヒムに日本人の正直な徳目を確信させたかもしれない。この関連で私が興味をひかれたのは、牛乳配達についての事例である。各戸の方形の箱に牛乳瓶を入れ、空き瓶を回収するシステムはイブラヒム来日当時には確立していたことになる。イブラヒムは暗闇に紛れて盗むものがないことや、配達に要する手間などに関わらず安価なことが日本の特質と記述している。牛乳配達には盗難や毒物の混入などのリスクを考えないでよい治安の良い日本だから成り立つシステムだと新たに認識した。

また上記のように手間を惜しまず誠実にサービスを行う日本人を賞賛している。鉄道の時間は正確で列車も立派で速度も速い。小包はロシアでは白か黒どちらかの紐で縛った上で封印しなければならず、それでも紛失することが多々ある。日本では紐の色の指定はなく、片方に住所を書くだけでよく、紛失などはあり得ない。郵便は年中無休で昼夜開いており、便局・支局が多数あるだけでなく、薬局でも書留を受け付けている。

市中の繁華な広場などでは新聞が掲示され、貧しい人でも無料で読めることが気前のよさと述べている。気前の良さという徳目では大倉喜八郎の紹介もそれに分類できるだろう。イブラヒムが大倉美術館を訪問したときの職員の話は次のようである。「貧しい子供のために全寮制の中学校で、…全費用を大倉さまが出されました。…七十歳を記念して、故郷の新発田市に水道をひかれました」「あの方の人生に目録【美術館の目録】はありえませんが、…訪れた人が何かを所望するとお断りになれないのです。所望するというよりも…お気に召しましたか？とさしあげてしまうのです。」また横浜では宿を引き払うときベルト・コート・ブーツなど旅に余分なものを

山名という少年にあげたところ、彼はそれを同僚の佐々木にもらうように言っている。「佐々木君は私よりも貧しいのです。年老いた父母もいます。ずっと役にたちましよう。」

トイレがきれいで水が置かれている。また車内も清掃され、イスタンブルを思わせる狭い路地もゴミ・チリがなく打ち水がされている。風呂の描写もある。これらは清潔という徳目に入るのである。ただし、この当時の日本では混浴であり、恥部を隠す習慣がなかったため、ムスリムの彼は困惑したようである。ムスリムであるイブラヒムにとって望ましくないものとしては火葬も取り上げている。「私の最後のときが訪れるとしてもここにはおりませんように」と記述されている。

男女に関してはどうかであろうか。ベールを被らない日本女性は開放的であるが、しかし西洋ほど男女が馴れ馴れしくないと述べている。結婚は保護者の同意が必要で女性は男性を敬わなければならない。家事は女性の役割で女性は家庭内ではある程度自由であるとはいえ夫の承諾がなければ実家にも行けない。客との同席も夫の許可で儀礼に則してのことである。子どもの教育は母親の役割で、生計には責任がない。このようにイスラーム世界ほど閉鎖的ではないが、西洋ほど女性は自由ではない。夫の許したこと以外に、妻はいかなる行動をとることもできず、妻は家庭の主婦であり、夫には絶対に服従しなければならない点などはイスラームと完全に合致していると結論している。

トルコ人にとって尊敬する日本軍人であった大山巖と東郷平八郎の記述も日本の特質として記述されている。大山は寄宿学校の校長をし、週のうち六日は学校に寝泊まりし、貴族の子弟も貧民の子弟

も分け隔てなく教え、学校に寝泊まりしている。元帥であるもの
なぜ「校長のような職を選んだか尋ねたところ：『千八百人の大山
を育て上げてみたい』と答えた」と驚嘆している。

東郷平八郎の邸宅は小さく質素であるという次のエピソードを紹
介している。アメリカ人旅行者が六〇人訪問したところ、自分の官
舎は六人以上入りきれないことをわびたのである。この記事を読ん
だ海軍将校らが名声にあざわしい家屋購入の資金を集め、東郷を訪
問したところ、「海軍の学校はどこも予算に窮している。このお金
を学校に寄付してもらえればありがたいのだが」と述べている。こ
れらによって日本人の慎ましきや祖国と国民への愛などの美德を説
明している。また軍服はいたって質素であり、外見では将校も兵卒
もほとんど区別できず、参謀本部の大島將軍は食事も兵卒とともに
とり、肩にも足にも階級の別を示す標識はみられなかったという。

日露戦争における、日本人の勇氣は賞賛すべき例示にことかか
ない。「日本人にとって、祖国のために命を捧げることは何でもない
ことです。男も女も『前へ進め』と言われれば、そのとおり行進し
ていきます。これは日露戦争で明らかになりました。」と大隈重信
との会談で述べている。

このように彼は日本人に対して偶像崇拜を除いて、清潔・礼儀・
誠実・勇氣などイスラームの基本と一致すると極めて高く評価して
おり、日本人がイスラームを受け入れることを確信した理由の一つ
としている。しかし軍服の例などだけでなく、昼夜を問わず一人の
酔っぱらいにも出会わなかったなど、現在の私には史実とは受け入
れがたいものがあり、日本人をみてその美德を感じたのではなく、
日本をイスラーム世界に取り込める理由をさがし、そしてそれをタ

タール人などの読者に訴えたものであろう。

ただし、好意的な記述ばかりではない。火葬や男女混浴だけでな
く、日本人蔑視と取られる内容や少なくとも不快を感じる表現も見
受けられる。海岸部などで山を崩して埋め立てトロッコを使って作
業をしている小柄な日本人をみて「地を這う動物」を彷彿させると
述べている。また小柄という身体的特質については何回も繰り返し
記述が見受けられる。日本女性が、おんぶする習慣に幾度か言及し
ており、このため女性の乳房は小さく、乳が足りないので大きくな
れないのではないかと仮説をたてている。小柄な体格を鍛錬によつ
て強靱な体に鍛えていることを賞賛しながら、人力車や荷車などに
ついては動物が果たすべき役割を鍛え上げた人間が果たしていると
描写している。その他些細なことであるが下駄の音が耳障りであると
述べられている。戸水寛人衆議院議員の会話によつて衆議院の決議
が貴族院で効力を失うことを紹介し、彼が見物していた衆議院に警
官が常駐し、傍聴者の一人が議場から追放させられたことも記述さ
れている。

美德としてか欠点としてかは判断しかねるが、かつてのエコノミッ
ク・アニマル的な勤勉さへの描写が多々ある。列車内ではみんなが
新聞を求め、「どんな貧しい家でも、朝まつさきを買うものといえ
ば、それは新聞である。夜が明けるとまもなく、新聞屋が車を通る。
：村では、男も女も決してほんやりとしていない。一日中必ずなに
がしかの仕事をしている。」横浜においては、人々は皆何かにせき
たてられていて、往来も「小走りに通り過ぎていく。日本人が何を
するにしてもせっかちな国民であることがみてとれた。」紀元節の
祝日のときには「西洋人は、皆祝日とあれば、さあ休もうと店を閉

じてしまう。工場も休みになる。…日本人は反対に祝日には二十四時間昼夜ぶつとおしで働く。その日に限って店開きするものもある。そしてある日本人は『たとえ一円でも余分に儲かれば、もつとめでたいではありませんか。』と答へ『祝日は仕事が多く、わしらの日給も増えますんで。』と祝日に一儲けするのを喜び、おめでたい日にとらえている。また使い捨ての容器による駅弁というものによつて時間を無駄にせずと賞賛している。宣伝広告についても「ヨーロッパを凌駕する」ようすを詳述している。「宣伝車や、音楽、パレードなどによる宣伝も、ここでは頻繁に見られた。」特に仁丹は「ジンタン」という日本人は、ある丸薬を發明した。…この人物は、広告だけで年に三十五万円もの金を使うといわれる。…東京では、あらゆる通りで、この男の提督姿の広告を見ることが出来る。いずれも夜になると色とりどりのネオンで一年中光り輝いている。」とし、「たかが丸薬のためにいったいいくら使えばいいのだろうか」と広告好きの国民性を紹介している。

日本の発展は日本人の美德を堅持し、その伝統とアイデンティティを喪失することなく西洋の科学・技術を受容したことにあつたとイブラヒムは考えた。しかし日本も安易な西洋かぶれ「ハイカラ」によつて精神の毀損に直面していると映つたのである。

高田教授による文字改革反対論の紹介は以下のようである。「漢字は、元を正せば我々自身の文字ではありません。しかし同胞中国の文字なのです。」とし、「文字は人間の本性から必然的に生じたもので…その変化は人間の性質に左右され」日本人の教育普及に役立っているのは漢字であり、また日本人と朝鮮人・中国人と意志疎通ができるなどその利便性をあげ、「祖国を、そして民族を守ろうとす

るものは、自民族に関わるものは、なんであろうと守るべきなのです。」同様にミヤキという教授は「日本人の間にもヨーロッパの流儀にかぶれた『ハイカラ』青年がいることは事実で…どんなにヨーロッパ人を模倣しても、ヨーロッパ人になることはできません。着物や慣習を取り替えたところで、我々の容貌が変わるわけではないのです。ヨーロッパ人はそんな我々を見ても、なおかつ東洋の野蛮人とやうに決まっています。」

戸水寛人は、中国はロシア正教・イギリス国教会など宗教を通して四つに分裂させられる危機にあるとし、海軍増強を制約する予算やポーツマス条約の問題を考えない日本の「ハイカラ」を非難している。それに対してイブラヒムは、「西洋人は、東洋が蘇生することを望みません。日本の生存は東洋の生存を意味します。」と述べている。

そしてイブラヒムは、宣教師の陰謀に対してロシア正教のニコライはスパイであつたと言う梅原氏を紹介し、また一九〇六年にキリスト教が下火になると、宣教師によつてイスラームが日本に入ってくることを防ぐ陰謀がなされたと述べている。それは日本で宗教会議を開き、イスラームの弊害を証明しようとしたものであるが、日本においては宗教の自由によつて失敗する。それにも関わらず「ムハンマド」という本が五百万部発行され、イスラームへの誹謗中傷が行なわれた。同名の本は欧露でも数多いが、特に日本のものは「片手に剣、片手にコーランを持つており、あたかも剣とコーランによつてイスラムを広め…今までヨーロッパの悪意ある者たちによつて語られ広められた嘘よりも、数段動かしものである。」とイブラヒムは言っている。

ヨーロッパ人の陰謀により、キリスト教が日本の精神を毀損し始めており、日本人の精神を守り通すには宗教の支えが必要と考えた。しかしその宗教に関して、「仏教はその本質を失ってしまいました。とくに日本においては、まったく本道ははずれてしまっており、わが国では、神はあまりに増えすぎて数え切れません。…自分自身が疑問を持っている宗教をどうして他の者に真理だなどと言って勧められましょう。」という梅原氏の話のように「仏教はこの任務を遂行することは不可能」で、「安全な近道はイスラムを描いてほかにはあるまい。」と断じているのである。

「日本人の慣習や道徳ならびに生活様式は見事にイスラムの慣行や道徳にかなって」いることを発見したイブラヒムにしても、政治的・経済的利益がなければ日本人の改宗がありえないことを認識していた。「日本人に形而上のことからを納得させることは所詮無理」で、「政治的な目標が掲げられなければ、宗教の問題は日本人にとつては何の意味も持たなくなってくる。」そこでイブラヒムは以下のような点を力説するのである。「日本にも一つ欠点がある。それは貧しさである。土地は狭いのに人口が多い。しかし、これにも解決策がないわけではない。唯一の道は満州に植民することである。道はモンゴリアにも開かれており、…」「日本人がイスラムに改宗すれば、中国ムスリムは日本商品に一大市場を提供するだろう。また満州の人口の半数はムスリムである（明らかな過大評価：訳者小松氏注）。日本は武力を用いずしてこれらの地域を獲得するであろう。インド洋の島々も…二千万ものムスリムがひとにぎりのオランダ人の支配下にあるからである。彼らはいつでもイスラムに改宗した日本人の側に身を投ずるであろう。…日本にとつての最大の敵、ロシ

アの領内にもムスリムは三千万を数えている。…マレー半島やシンガポール、さらにジョホール国を含めた地域には七つのムスリムの首長国があり、…」。このように西アジアから東アジアや東南アジアに広がるイスラム世界の地勢学上の重要性を訴えた。「中国との統一問題は、大変難しい問題なのです。…宣教師達が割り込んできたからです。彼らは中国人に私達を嫌悪させようと全力を傾けてきました。」という戸水寛人に対して、「中国人の三分の一はムスリムです。中国で最強の戦闘集団はイスラムの部族です。」と述べ、特に中国への勢力拡大をはかる日本にとつて、中国ムスリムは最善のパートナーであり、その存在に注意を喚起している。同様の主張は他にも幾つか見られ、例えば、「日本の輸出品にとつて、唯一の市場は中国である。…しかし中国人と日本人との間には生来の敵愾心がある。…中国にいるキリスト教宣教師とはいえば、できるだけ中国人の反日感情を煽るようにしむけてくる。…中国に定着するためには、中国ムスリムたちと親しく交わる以外に方法はないことがわかる。」またイブラヒムは「東洋の存続はすべて東洋の統一にかかっている」として、汎イスラム主義と重ねてアジア同盟の構想を提起している。そして「その前提には、まず日本人と中国人との統合が必要」と説く。そのためには「もし日本に『モスクのような』イスラムの象徴がすえられたならば、問題は速やかな展開をみせるに違いなと思います。日本にこれがないばかりに、いくら日本人を東洋の指導者におし立ててみせたところで、中国『ムスリム』の熱い期待に応えることは難しいでしょう。」と『大東京』新聞記者中野氏に語っている。

このようなイブラヒムの発言は、明治末期のアジア主義者やナシヨ

ナリストの注目を引くことになるのである。

五 イブラヒムと大アジア主義

「弱いものはどこに訴えても無駄です。大砲や銃を持たぬ者の言うことは通らぬ、と申します。：ヨーロッパ人は怖がらなければ耳を貸そうとしません。ヨーロッパ人はキリスト教徒だけを保護するのです。」イブラヒムは、アジア人は侵略に対して防衛していかなくてはならず、そのために単純に日本をアジアの同胞とみなし、日本を盟主にして帝政ロシアのムスリムをはじめアジア諸民族を解放することを期待した。そしてアジアの連帯・統一のためにムスリムへの対策の必要性を主張したのである。

イブラヒムが汎イスラーム主義と重ねて提起したアジア同盟の構想は、明治のナシヨナリストたちの構想にもかなうものであり、わずか半年ほどの日本滞在の間に多くの政治家や軍人達と会合がもたれていくのである。彼らを分類すると次のようになるだろう。

(1) 陸軍参謀本部の情報・諜報関係の軍人

対ロシアの情報・諜報を統括する参謀本部の福島安正と思われる「フクシマ」は、「日本からまっすぐにヒジャーズに向けて出立下さい。」とヒジャーズ地域の偵察を目論んでいる。また大原武慶は満州の昌図において軍政官を勤め、一九〇七年陸軍中佐をもって予備役を離れたが、依然参謀本部と太いパイプを持っていた。彼の部下であった山岡光太郎は、のちにムスリムとなり、日本人として初めてのハッジを行っている。

(2) 大アジア主義を唱導する国粋主義者

玄羊社を率いる頭山満、『大東京』新聞記者を名乗る中野常太郎、中山逸三がいる。

(3) 対口強硬論を主張し、大アジア主義に共鳴する政治家

自由民権運動の闘士であったが、国権論の姿勢を強め日比谷事件をおこした河野広中や、孫文の中国革命を援助していた犬養毅がいる。

彼らによってイスラーム公布を目的とした「亜細亜義会」が結成され、既に述べたようにモスク建設という実際の提案が検討されていく。大原武慶は「われら五名は先生のお考えに賛同し、日本におけるイスラーム公布のために、物心両面にわたって力の限り努力することを誓います。：モスク用地確保の件をお命じ下さい。」土地に関しては亜細亜義会より宮城に近いが狭い場所と、早稲田大学の近くの広大な場所の二つの候補地選択の相談があった。

しかしイブラヒムの来日目的も純粋で精神的なイスラーム公布だけが目的ではなかった。アジア解放のための日本のイスラーム化であり、「同時に日本のイスラームをいずれカリフの座に結びつける算段を」考え、西のイスラームの老大国であるオスマン帝国と日本を結びつけようとした。このため「モスクなどの建立にあたっては、あらかじめカリフとシエイヒユル・イスラーム庁より認可を受けねばなりません。こうした宗務の指導をたえずカリフの座にあおぐ」必要があると述べている。中野宅の会合で同様の話題になり、正式の国交のないオスマン帝国にモスク建設の許可をとるため亜細亜義会を代表してイブラヒムはイスタンブルに赴くことになった。

六 日本離別後のイブラヒムの足跡

一九〇九年六月一五日、イスタンブルへ赴く旅に出て、途中、北京などを訪れた。これは朝鮮・中国にいるムスリムと接触をはかるうとするものである。

ボンベイで約二ヶ月半待ち、大原武慶の指示で山岡光太郎と合流する。山岡のイスラームへの改宗は宗教的発心ではなく、メッカ潜入のための便宜的手段であったように、山岡の『アラビア縦断旅行』には描かれている。ボンベイからハイデラバード藩王国の仕立てた巡礼船に乗りジッタに二月一日、ついにメッカ入りを果たした。

その後メデイナへの巡礼も行い、イブラヒムが所用のためイスตันบูลへは先に山岡が向かった。イスตันบูลでの日本に対する期待は強く、歓迎を受けた。二人は日本におけるモスク建立の許可問題に目途をつけ、アジア諸民族の覚醒とムスリムの連帯を訴える演説などを盛んに行なった。

しかしオスマン帝国の青年トルコの革命やカリフへの不信感などが大きな影響をもっていた。「青年トルコ人たちは、なぜアブドゥルハミト二世をスルタン・カリフの地位から引きずりおろしたのでしょうか。：革命は皆が好ましいと思いましたが、アブデュルハミト二世を帝位から降ろすということを好ましいとは誰も考えなかつたはず」すでにボンベイではラヒム・バフシャによつて、イブラヒムのパン・イスラミズムは打撃を与えられていた。またメッカでのミナーの犠牲祭直後に「統一と進歩委員会倶楽部」において開かれた集会では、各地からの各民族の代表がイスラームの連帯と統一の緊急性を力説した。しかし最後にアズハル神学校に留学していたクルド人が、イスラーム世界を統一していくにあたって宗教による絆ではなく、アラビア語による言葉の統一が肝心だと主張した。

またこの二〇年前一九八〇年のエルトゥール号遭難も衰退の象徴となっていたようである。キヤーミル・パシャはこう語っている。「先生、来られるのがいささか遅かったです。アジズ帝の御世に

みえていれば、さぞかしご厚意をたまわつたでしょう。：当時わが海軍には威力があり、あなたのような方を特別の装備とともに派遣したことでしよう。：軍艦エルトゥール号は不幸な結果に終わりました。ハミト帝もお好きでしたが、力はなかつたのです。」

このようにオスマン帝国のカリフを軸にしたパン・イスラミズムは絶対的な支持を得ることができず、オスマン帝国のカリフの権威はイブラヒムの期待するように絶対的なものではなくなつていた。そして彼らのパン・イスラミズムの構想は力を持つことはできなかった。また青年トルコも次第にトルコ主義を国家統合の理念にしていった。

しかし彼はイスตันบูลにおいてジャーナリストとして活発な活動を展開する。『ジヤボンヤ』を含む大旅行記『イスラーム世界』を代表に、『ムスリムの親交』などの雑誌を創刊・執筆した。

また一九一一年のイタリアの北アフリカ侵略に対しては自ら前線に赴き、ジハードを呼びかけ大旅行のあいだにつちかつた同士のネットワークを使って日本などから精神的・物質的支援を求めた。さらに第一次大戦ではドイツの捕虜になつたロシア軍からオスマン軍として戦うタタル将兵を募るため、ベルリンに赴き、ムスリム将兵からなるアジア大隊の編成に尽力した。

ロシア革命によつて帝政時代の抑圧は終わったことを期待したイブラヒムは、祖国へ帰還する。故郷タラで二年間のムスリム子弟の教育にあつた。しかしポリシェビキの暴圧に直面したイブラヒムはソビエト政権下でのイスラーム存続の道を探つたが、ソビエト政権に見切りをつけイスตันบูลに戻つたのである。

七 再び日本へ

ムスタファ・ケマルのトルコ共和国は独立戦争からソビエトと友好関係を結んでいた。このためイブラヒムの反ソビエト的言動を放置することはできなかった。加えてカリフ制を廃止した世俗国家トルコ共和国にとって、パン・イスラミズムは体制を崩壊させる危険性さえあった。このためイブラヒムは一九二六―三三年までコンヤ近郊に逼塞させられた。

このような生活に終止符を打たせたのが満州国建国であった。漢・満・蒙・日・朝の五つの民族が共存共栄をはかり、五族協和の樂土を建国することを理想とする満州国では、五族ではないとはいえ膨大な人口を擁する回族は重要課題であった。さら日本の対外拡張主義が満州国から大東亜共栄圏構想に発展していくにつれ、日本のイスラーム政策が展開されていく。タタールは日本にとつて統治の対象であるのみならず、蘭領東インド・英領マレー半島などのイスラーム世界への貴重な窓口になっていた。

ロシア革命と内戦によってロシアからの多数のタタール人避難民が流入し、第二次大戦前には東京・名古屋・神戸・熊本などにもタタール人コミュニティが形成されていく。また多数のタタール人が日本に移住し一九二八年には東京回教団が結成されるまでになった。しかし日本の対外政策をめぐる皇道派と統制派、陸軍中央と閥東軍との確執の影響も受けてタタール人社会の間にも派閥抗争が生じていた。こうした分裂を食い止め、まとめていくために三三年にイブラヒムの再来日を実現するのである。東京に居を据え一九三八年落成した代々木モスクでイマーム職を勤め、内外のムスリムの指導にあたった。また陸軍大将林銑十郎を初代会長とする大日本回教

協会の創設にもかかわった。これは東亜新秩序の建設にあたり、イスラーム世界の調査・研究と、ムスリム諸民族との友好・連携を促進することを趣旨としたものである。イブラヒムはソ連領内でタタール人独立国家建設を目指したナシヨナリストのグループを独立妄想狂として激しく非難した。タタール人の解放はソビエト・ロシアに對する日本の勝利によって初めて可能なのであって、ムスリムに對してはきたるべき戦争においては日本を支援するように呼びかけたのである。

『ジャポonya』の中で「私の最後のときが訪れるとしてもここにはおりませんように」と記述した日本の東京で一九四四年八月三十一日に没し、多摩墓地に葬られたのである。

終わりに

私も経験したことだが、トルコを旅行すると現地での日本人への親切さなどに驚く。これに大きく寄与した一人がイブラヒムであることは間違いない。『ジャポonya』によって日本を詳細に記述し、トルコにおける日本人観を形成したのである。また日本のイスラーム学の泰斗井筒俊彦氏は晩年のイブラヒムからアラビア語を習い、イスラーム研究への道を開いたといわれる。

《主な参考文献》

『ジャポonya』 アブデュルレシト・イブラヒム

(小松香織・小松久男訳) 第三書館 一九九一

『近代日本とトルコ世界』 勁草書房 一九九九